

# 甲波宿禰神社神輿の解説

(所在地・群馬県吾妻郡東吾妻町箱島1136)

甲波宿禰神社には神輿が2基あり、神社社殿の東側にある小屋2棟のうち、手前の小屋に昭和59年に建造した神輿を納め、奥の小屋に「ハナグルマ」と呼ぶ山車に据えた旧神輿(写真1)を安置する。昭和58年度の群馬県村づくり事業を活用して神輿を新造するとともに、旧神輿を修理し、山車を新造してそれに据えた。

例祭日は春を3月15日、秋を9月29日とし、秋の例祭日に山車と神輿を曳き出す。現在は秋の例祭日を9月の最終土曜日とし、当日は午後2時より祭典を執り行った後、3時より先頭を山車、それに続いて神輿を曳き出し、箱島集落内を巡り、8時には公民館に入る。一晚そこにとどめ、翌日に神社へ戻す。山車の前方に三張の太鼓を据え、旧神輿を挟んで後方に一張の太太鼓を据え、小学校高学年生が叩く。さらに笛を吹く手が2人、鐘を叩く手が一人乗る。山車に2本の太いロープを付け100人位で曳く。神輿は三十代までの氏子40〜50人が交代で担ぐ。

次に神輿の造りを見ると、台輪外寸が3尺4寸3分、台輪下端から露盤上端まで4尺五寸の大きさで、露盤上に宝珠を据える。修理前の旧神輿の写真(写真2)を見ると露盤に載るのは鳳凰である。すると山車の前方上部に鳳凰が取り付けてあり、修理の際に改変したようである。また、各部の彩色や飾り金物も復元していない箇所もあるようである。ここでは修理後の神輿で建築解説すると、二軒繁極とする屋根は方形で黒塗り、垂木は黒味を帯びた朱塗りとし、真鍮製の葺返を設ける。組物は出組で黒塗りとする。胴も黒塗りで正面は唐戸を設け、戸脇には昇り龍・降り龍の彫り物が取り付けられる。他の三面は七宝文様の彫りを施す。長押の上の小壁も黒塗りで、正面には渦巻く雲の彫刻とし、他面は青海波文様の彫りを施す。下長押の下の腰羽目は正面を金色塗りの波の彫刻とし、他三面は黒塗りで青海波文様の彫りを施す。

甲波宿禰神社の神輿は由緒によれば天正三年(1575)作と伝えられる。組物、彫り物、飾り金具も簡素で、勾配のゆるい伸びやかな屋根など全体の造りを見ると、少なくとも江戸時代中期頃の建造と考えることができるのではないだろうか。総代によれば墨書きが神輿内側にあつたということなので、あらためて解体する詳細な調査により建造年代が特定されることを期待したい。

(金井淑幸 金井建築研究所代表)

金井



写真1 旧神輿外観



写真2 旧神輿修理前の写真